

音楽授業の「主体性」に関する一考察

—保育者養成校におけるピアノ個人指導・クラス授業を通して—

本多 峰和、津島 忍

愛知学泉短期大学

A study on “independence” of music lessons: through individual piano tutoring and lessons in a class in training schools for childcare workers

Miwa Honda, Shinobu Tsushima

キーワード：音楽教育 music education, 主体性 independence, ピアノ学習 piano learning

1. はじめに

社会で働くためには、自らが社会の中での仕事や役割を知り、それに必要な力を持つことが大切である。そのためには社会において様々な人々と円滑に仕事ができる環境を自らが作り出すことも重要ではないかと考えられる。愛知学泉短期大学(以下本学)では経済産業省が「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力¹⁾」として提唱している社会人基礎力を養うためのプログラムを積極的に取り入れている。

そこで本研究では本学における2017年度後期「幼児音楽表現Ⅱ」の授業実践において社会人基礎力の能力要素の一つである「主体性」に着目し、主体性がどのように発揮されているのかを考察することを目的とする。

(1) 社会人基礎力とは

2005(平成17)年7月、経済産業省において、企業の経営・人事担当者、教育関係者、NPO、行政など、産学官の有識者を集めた「社会人基礎力に関する研究会」(座長・諏訪康雄法政大学大学院教授)が発足し、「仕事の現場で求められている能力」について検討された。共通項として「人との関係を作る能力」「課題を見つけ、取り組む能力」「自分をコントロールする能力」を軸に議論が進められ、翌2006(平成18年)2月に「職場や社会の中で多様な人々と共に仕事をしていくために必要な基礎的な力」と

して社会人基礎力の概念が発表された。²⁾ 社会人基礎力は、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力という3つの力と、それらを構成する「主体性」「課題発見力」「発信力」など12の具体的な能力要素で構成されている。³⁾ ^{注1} 経済産業省は「社会人基礎力は社会人として活躍するために必要な能力の一面であるが、これだけがあれば十分というものではない。社会で働くためには、読み書き・計算・ITスキルなどの『基礎学力』や、仕事に必要な知識・技能などの『専門知識』が必要である。さらに個人の責任感や思いやり、公共心、倫理観、基本的なマナー、一般常識・教養などの『人間性・基本的な生活習慣』は全ての活動の基盤となる。社会人基礎力は、これらの他の要素と重なり合う部分を持ち、さまざまな経験を通して相互に作用しながら、共に成長していくものである。つまり、社会人基礎力は、それだけを単独に高めるというのではなく、よい経験や活動をすることにより循環的に向上するものと考えられる⁴⁾」と述べている。

(2) 本学での社会人基礎力への取り組み

平成19年度から3年間、全国19大学でのゼミや研究室・授業といった教育活動を通して体系的に社会人基礎力の育成・評価を進めるためのモデルプログラムの研究・開発が行われた。⁵⁾ さらに社会人基礎力の育成を推進する観点から「社会人基礎力を育成する授業30選」が実践事例として選定されている。⁶⁾ また大学生がゼミ・研究室単位で授業を通じ

てどれだけ社会人基礎力が伸びたかチームで発表し、その成長度合いを競う「社会人基礎力育成グランプリ」も開催されている。⁷⁾

本学は平成19年度、20年度、21年度の経済産業省モデルプログラム開発事業の採択校愛知学泉大学の短期大学である。愛知学泉大学と同様、本学も社会人基礎力推進委員会が設置されており、シラバスでは社会人基礎力の発揮法を記述するなど大学で身に付けた基礎学力と専門知識を実際の仕事に活かせるよう社会人基礎力を養うためのプログラムを積極的に取り入れている。

(3) 主体性

明鏡国語辞典(第二版)によると主体性は、「他から影響されることなく、自分の意志や判断によって行動しようとする性質・態度。」⁸⁾とある。経済産業省における社会人基礎力の主体性は、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力、という社会人基礎力を構成する主要な3つの能力である前に踏み出す力の能力要素の中の一つ「物事に進んで取り組む力」とされている。⁹⁾そして本学での社会人基礎力の主体性は「目的・目標を自己のものとし、物事を一歩でも前に進めるために成すべきことを自発的に探し出して積極的に行動できる力」としている。さらに学生に理解しやすく、①人から言われたことだけでなく自らやるべきことを考える。②指示を待つのではなく自ら行動を起こす。③積極的に取組を進める。などの説明をしている。また、「達成する目標は何のために必要なのか、その目標に対して自分の考えが明確になっているかが重要です。目標が明確になっていないと『人に言われたからやっている』『人の考えに常に従う』『人から指示されるまで動かない』といった受動的な行動になります。目標を明確にすることは、自分の意見や考えを持って、『自分ならこうする』『自分はこう考える』といった能動的な行動をとることです。」という行動目標も示している。¹⁰⁾

経済産業省は主体性を、「人間が生きていくために、欠くべからざる本質的な力であり、ある課題や状況が発生したときだけに発揮される力ではない。いかなる場面においても人に備わった状態であるのが主体性である。そしてほとんどの社会人基礎力の能力要素は、この力がベースにあってこそ発揮できるのである。社会人基礎力の育成にとってこの力の育成

は非常に重要である¹¹⁾」としている。

では、音楽教育における主体性はどのように考えられるのであろうか。

本学における幼児教育学科の学生においては自ら進んでピアノに向かい着実に技術が増す学生もいればそうとは言えない学生もいる。また、人前でピアノを演奏する、歌を歌うなど、人前に出で音楽を表現することが苦手な学生も少なくない。将来保育者を目指す学生には人前で歌う、あるいは話すことも必要になるであろう。

そのため音楽授業では音楽の技術だけではなく、人前で音楽を表現することも大切な要素として取り入れる必要があると考えられる。その場合いかに主体性を持ち取り組むことができるか。このことは将来保育者を目指す学生には重要なことではないだろうか。

そこで、本学における音楽の主体性を考えてみたい。まず、本学が主体性として定義しているのは「目的・目標を自己のものとし、物事を一歩でも前に進めるために成すべきことを自発的に探し出して積極的に行動できる力」である。これをピアノ学習および歌唱において自らが定めた目的・目標に向かい努力を惜しむことなく取り組むことができる。そして人前で音楽を表現することに苦手意識が少なくなるよう、人前で音楽を表現することを大切な要素とする。さらに「音楽を楽しむ」ことは音楽において主体的に活動できる基盤であると考えられる。

以上3点をふまえ本研究では、本学における音楽学習における主体性を、「自ら進んで目的・目標を定め、その目的・目標に向かいあきらめずに努力すること。そして音楽を人前で楽しみながら表現することができる。」とする。

2. 本学における音楽に関する専門科目について

(1) 音楽に関する専門科目「演習」について

本学における幼児教育学科の保育者養成課程では、音楽に関する専門科目を1年次では前期に「幼児音楽表現Ⅰ」、後期に「幼児音楽表現Ⅱ」という演習で行っている。内容はクラス授業を(1クラス32~36名の3クラス)90分行い、それと並行してピアノ奏法と弾き歌いをピアノ個人指導として行っている。ピアノ個人指導については入れ替えも含め一人あた

り 18 分である。以下、2017 年度に行った「幼児音楽表現Ⅰ」「幼児音楽表現Ⅱ」について述べる。

1) 「幼児音楽表現Ⅰ」のピアノ個人指導

「幼児音楽表現Ⅰ」のピアノ個人指導では、入学者全員のピアノ演奏能力を津島が評価し、4つのコースに分けている。4つのコースに関しては3. 授業内容で述べる。

「幼児音楽表現Ⅰ」のピアノ個人指導の目的は次の3点である。

- ①入学前に学んだ各自の演奏能力のレベルを振り返り、さらに高い演奏能力を身に着けること。
- ②演奏能力を向上するために、必要な練習時間と練習方法を身に着けること。
- ③保育現場で必要とされている弾き歌いの基礎的な演奏能力（歌唱とピアノ演奏を同時に行う、演奏を中断しない）を学ぶこと。

以上を目的としている。

また前期 15 回の授業のうち、8 回目の中間の振り返りと期末試験において、実技演奏の試験を行っている。これはクラス全員の前で、演奏（ピアノ独奏及び弾き歌い）する体験を通して、自分の演奏を振り返り、実習や採用試験、就職した際の演奏に向けた経験を積むことを目的とし津島と非常勤講師 9 名で実践を行った。

2) 「幼児音楽表現Ⅱ」のピアノ個人指導

「幼児音楽表現Ⅱ」のピアノ個人指導では、「幼児音楽表現Ⅰ」で培った音楽力を踏まえ、獲得した能力をさらに向上させ、実習での演奏や、クラス全員の前で演奏できるピアノ技能や弾き歌いの能力を獲得することを目的とし津島と非常勤講師 9 名で実践を行った。

また、「幼児音楽表現Ⅰ」と同じく後期 15 回の授業のうち、8 回目の中間の振り返りと期末試験において、実技演奏の試験を行った。

非常勤講師の勤続年数は、0～5 年未満 4 名、5～10 年未満 2 名、10～20 年未満 2 名、20 年以上 2 名（2018 年 3 月現在）
（年齢別 30 歳代 2 名、40 歳代 3 名、50 歳代 4 名、60 歳代 1 名（2018 年 3 月現在）である。

3) 「幼児音楽表現Ⅰ」のクラス授業

「幼児音楽表現Ⅰ」のクラス授業では、わらべうたを教材とし、となえによる明瞭な言葉の発音、拍動に合わせたリズム感、遊びながら歌う楽しさを見つけることを目的としている。さらに、クラス全員の

前で、わらべうたやあそびうたを披露し、表現する楽しさを相手に伝えることを体験することも目的とし非常勤講師が実践を行った。

4) 「幼児音楽表現Ⅱ」のクラス授業

「幼児音楽表現Ⅱ」のクラス授業では、保育者として、さらにふさわしい歌声を養うことを目的とした。そして季節の歌を通じ、行事などの意味も理解した上で保育者として表現力豊かに歌うことも目的とした。また、クラス全員の前で 2～4 名のペアやグループで毎授業時歌うことも行った。これは人前で歌う時の姿勢、態度などクラス全員で共有し合いお互いに良いところを取り入れ、自身の表現に活かすことをねらいとした。また、緊張感を緩和することも視野に入れ本多が実践を行った。

(2) 「幼児音楽表現Ⅱ」における社会人基礎力の取り組み

クラス授業およびピアノ個人指導ともに、シラバスにおいて学生に発揮させる社会人基礎力の能力要素として、主体性、実行力、課題発見力、創造力、発信力、傾聴力、状況把握力、規律性を選び、それぞれ学生に求める社会人基礎力の能力要素の具体的な行動事例として記述している。

以下シラバスにおける上記内容を示す。（表 1）

表 1.

学生に発揮させる社会人基礎力の能力要素		学生に求める社会人基礎力の能力要素の具体的な行動事例
前に踏み出す力	主体性	技術の習得のために自ら練習をすることができる。 授業の中でわからないことや疑問があればそのままにせず質問して解決することができる。
	実行力	困難があっても目標を変更せず到達することができる。
考え抜く力	課題発見力	苦手なことも諦めず課題を見極めることができる。 予習、復習の際に学習上の問題点を考えて取り組むことができる。
	創造力	固定概念に捉われないことなくいろいろな方向から考えることができる。
チームで働く力	発信力	自分の感じたことや、考えを発表することができる。
	傾聴力	歌唱・グループ発表を通して、意見交換や自分の意見を述べるすることができる。
	状況把握力	良い授業を作り上げるため、クラス全体の状況を把握することができる。
	規律性	自分の都合を優先することなく集団のルールを守ることができる。

3. 授業内容

(1) ピアノ個人指導



1) 4つの能力別コースについて

学生の入学前のピアノ演奏経験が様々であることから、本学では、ピアノの経験年数や演奏した曲を調べ、能力別に4つのコースを設定している。

4つのコース設定については、学生の練習意欲が増すように、無理のないレベルで設定には配慮している。また、コース決定後であっても臨機応変に変更を認めている。

Aコースは未経験者または経験年数3年未満、あるいは小学生以前の経験のみで、音符や拍やリズムの理解、音楽用語の知識、演奏技術（音符や指使い、リズムや拍の演奏技能）が身に着いていない学生。（バイエルピアノ教則本未経験）

Bコースは、入学時に6年程度の経験があり、楽譜を読むことができ、両手で演奏できるが、難易度の高い演奏技術はまだ身に着いていない学生。（バイエルピアノ教則本80番以前）

Cコースは、9年程度の経験があり、ピアノ演奏するための音楽知識や演奏技術は有している学生。（バイエルピアノ教則本終了程度）

Dコースは、様々な曲を問題なく読譜し、自力で練習し演奏・表現ができる技能を有している学生（ブルグミュラーの練習曲やソナチネ等以降の楽曲の演奏経験がある）と分けている。

2) コース別課題曲と共通課題曲

「幼児音楽表現Ⅰ」と「幼児音楽表現Ⅱ」の各コースの課題曲は、A・B・C・D各コース別課題曲（表2）と共通課題曲（表3）を設定している。

題曲数は、Aコース ピアノ曲25曲、Bコース ピアノ曲10曲、Cコース ピアノ曲13曲、Dコース ピアノ曲7曲となっている。共通課題曲の曲数は13曲である。

「幼児音楽表現Ⅱ」のピアノ個人指導で学習する課題曲数は、Aコース ピアノ曲10曲、Bコース ピアノ曲9曲、Cコース ピアノ曲5曲、Dコース ピアノ曲3曲となっている。共通課題曲の曲数は12曲である。

表2.

	A コース	B コース	C コース	D コース
幼児音楽表現Ⅰ	メトード ローズピアノ教則本より抜粋 25 曲	バイエル	バイエル	バイエル
		73	80	80
		75	81	81
		78	82	82
		80	88	96
		81	89	100
		82	90	自由曲 2 曲
		88	91	
		89	93	
		90	96	
		91	97	
			98	
幼児音楽表現Ⅱ	バイエル	93	101	自由曲 3 曲
	80	96	102	
	81	97	104	
	82	98	自由曲 2 曲	
	88	99		
	89	100		
	90	101		
	91	102		
	93	104		
	96			
	97			

「幼児音楽表現Ⅰ」のピアノ個人指導で学習する課

表 3.

幼児音楽表現Ⅰ	幼児音楽表現Ⅱ
ちょうちょう	[指遊び・手遊び] わになって
おべんとう	山のぼりホイ
おはよう	なれるかな
ハ長調 ビーマーチ	あたま・おはな・おめめ
ト長調 むすんでひらいて	あさがおコリヤコリヤ
へ長調 きらめく星	[子どもの歌] チューリップ
ニ長調 ミッキーマウス・マーチ	ジングルベル
変ロ長調 イ短調	とんぼのめがね
	しゃぼん玉
	たなばたさま
	水あそび
	おかえりのうた

先行研究において能力別に進度を設定している大学、短期大学では、「テキスト本教材を、5つのグレードに設定し、入学前のピアノの学習経験によって学生個々に適した段階から練習を始められるようにしている」(小倉 2009) ¹²⁾、「学生のピアノの演奏の進度や能力により、授業開始時から使用するテキストを個別に設定している」(實野 2006) ¹³⁾、「授業開始の時点で学生個々のピアノ経験や技能の習熟度合いには大きな差異があるため、学生個々の能力と進度に見合った課題を課すためにピアノグレード表を作成している」(長澤ほか 2016) ¹⁴⁾ などの試みが見られた。

3) 「幼児音楽表現Ⅰ」コース別課題曲について

「幼児音楽表現Ⅰ」コース別課題曲(表2)については、メトードローズピアノ教則本を使用している。

「幼児音楽表現Ⅰ」のAコースの課題曲は、メトードローズピアノ教則本を設定している。

Aコースで学ぶ学生は、2017年度では、61名であり、そのうち未経験者は、43名(39%)であった。2011年度以降、毎年ほぼ4割前後の割合となっている。(注3)

篠原(1996)によると「保育科志望のために習い始めた者あるいは鍵盤に全く触れたことのない者は約25%¹⁵⁾」、宮脇(2001)は、「2000年に全国の短

期大学を対象に行った調査では、未経験者は31.8%¹⁶⁾」、また小森(2010)は「入学時にピアノの演奏経験が全くない学生や初心者が6割を占める¹⁷⁾」と述べている。平松(2011)は「新入生の約4割は、ピアノのレッスン経験が一度もない¹⁸⁾」、中村(2017)は「入学前のピアノ経験が全くない学生は34.6%¹⁹⁾」という結果を示している。

メトードローズピアノ教則本を選んだ理由については、早くからへ音記号を導入し、ト音記号とともに学ぶことができる。1曲の長さが短く、短期間に多くの曲を練習して学ぶことができる。練習課題の曲と、その課題を用いた小曲を交互に配置し、身についた演奏技能を確認できる。フランスの教則本で、小曲もフランスの民謡や歌をテーマにした曲が多いが、メロディーが優しく親しみやすい。などを考慮して、ピアノ未経験あるいは初心者の導入にふさわしいと考えたからである。

ピアノの導入書としてメトードローズピアノ教則本の特徴を、武田(1983)は、「良く分類され表題のついた楽曲と練習曲とに分かれています。高音部のドから始まるのは『バイエル』と同じですが、低音部記号が早く出て大譜表に入る時期が早く、音符を覚えながら早くテクニックの練習に入れる有効な進め方をしています。」と述べ、さらに「ピアノを弾く前にまず旋律を歌う、音の長さ、休符の長さを正確にリズム打ちし、基礎的なことを十分に身に着けさせるように書かれています。²⁰⁾」と述べている。

また、徳富・安原(2004)は「メトードローズピアノ教則本」と「バイエルピアノ教則本」の比較研究において、「『メトードローズピアノ教則本』は、高音部の「ド」から始まるのが特徴で、また、この教則本では早いうちからへ音記号を導入している。エチュード的内容を右手練習、左手練習、そして両手練習といった風に順を追って練習させ、そのあとに表現の必要な小曲、という形式でそれらを交互にしている。」とし、また「ワンパターンではあるが、片手の練習の次は両手で曲が弾けるので、そういった後の練習の楽しみはあるように思う。」と述べ、さらにメトードローズピアノ教則本とバイエルピアノ教則本を調性、音価とリズム、拍子、表示記号の項目で比較し、進度に大きな差がないことを示唆している。バイエルピアノ教則本、メトードローズピアノ教則本において同じ小節数の場合、バイエルピアノ教則本が、全体の3分の1程度しか進むことがで

きないのに対し、メトードローズピアノ教則本は約半分程度進むことが示されて、メトードローズピアノ教則本のほうが、小曲を数多く学ぶことができる²¹⁾ことも述べている。

4)「幼児音楽表現Ⅰ」の共通課題曲について

「幼児音楽表現Ⅰ」の共通課題曲(表3)については、各コース共通の課題曲であり、全学生に課している。

1年前期「幼児音楽表現Ⅰ」において、生活の歌(おはよう、おべんとう)、音階(ハ長調・ト長調・ニ長調・ヘ長調・変ロ長調・イ短調)、行進曲(ビー・マーチ、ミッキーマウス・マーチ等)を学習する。

弾き歌いは、ピアノ演奏と歌唱を同時に行うことを学び、音階は、バイエルピアノ教則本や子どもの歌で使われている調性を理解することを目的としている。行進曲は、「幼児体育」での活用や、実習で子どもの前で演奏できることを狙いとしている。

三好(2010)は、「バイエルピアノ教則本で〈調性・音階練習〉として、ハ長調、ト長調、ニ長調、イ長調、ホ長調、イ短調、ヘ長調、変ロ長調の順で登場し、♯4つ、b2つまでの長調が登場し、短調はイ短調のみとなっている。またイ短調は短調の存在を示す役割として採用されている。²²⁾」と述べ、小倉(2013)は、「『子どもの歌名曲アルバム』で使用されている調性の上位がハ長調、ト長調、ニ長調、ヘ長調、変ロ長調であるとし、調性を意識させることはピアノ学習の初期過程を学ぶ学生にとって誠に好都合である。²³⁾」と述べている。

5)「幼児音楽表現Ⅱ」コース別課題曲について

「幼児音楽表現Ⅱ」のコース別課題曲(表2)については、バイエルピアノ教則本を使用している。

バイエルピアノ教則本を採用した理由は、ピアノ演奏技能が高い学生でも、バイエルピアノ教則本を一度も演奏したことがない学生も多くなっているので、採用試験のピアノ実技試験において演奏する可能性もあるため、学習必要があると考えたからである。

本学卒業生の過去10年間の採用試験でのピアノ実技の演奏曲を見てみると、約4割の学生がバイエルピアノ教則本を演奏していた(自由曲の演奏も含む)。(本学幼児教育学科 採用試験受験報告書)

またバイエルピアノ教則本 80 番以降には、幼児

の音楽教材で多数使われている付点のリズムや、左手の小指を使用した持続音のテクニック、シンコペーションや装飾音符、三連符、手の交差の演奏技法、演奏の難易度が上がるアレグレットやアレグロの速度での演奏が多く取り入れられていることも考慮した。

バイエルピアノ教則本を保育者養成のピアノ指導で使用するについては、多くの研究が発表されている。

兵藤(2017)の『「バイエルピアノ教則本で学べる事」の分析』において、1 番から 106 番までに学ぶことができる項目を示し、「ピアノ初心者の教材は『バイエル』をしっかりと学べば十分に音楽の基礎が習得できるという結論に至った。²⁴⁾」と述べている。

採用試験での演奏課題曲としては、柏瀬・牛田(1986)が「バイエルピアノ教則本に対する批判に対応し、学校独自の教本を編集する傾向もみられるが、依然としてバイエルピアノ教則本を使うケースが多い。理由としては、国公立の教員採用試験(幼稚園、小学校(専科は除く))に臨むとき実技課題としてバイエル練習曲の演奏(No.80~No.104番の間で当日指定の方法が多い)が課せられるからであろう。²⁵⁾」と述べている。

保坂(1999)は、「岐阜、愛知の保育者採用試験では、52%の保育園と25%の幼稚園がバイエル程度の基本的なピアノ曲が弾けることを期待している。²⁶⁾」と述べている。

萩原(1993)は、バイエルピアノ教則本が現代のピアノ指導の初級教本として不適當であるという根拠について、次のように述べている。「書かれた時代が古く現代の音楽教育に関する研究成果ではない。使用されている音域が狭い。単純なメロディーと伴奏で音楽的ではない。外国ではもはや使用されていないという意見に集約されるであろう。²⁷⁾」

しかし久保(2017)はバイエルピアノ教則本の教員、保育者養成課程の教材としての意義として「現在も多くの保育養成機関で使われ続けているのは、必要な技術の習得にかけることのできる日数が限られている学生にとって、時間の制約の中で目的を達するのに適した教本であると認められているからであると言える。²⁸⁾」と述べている。

さらに、「例えばバイエル批判の中で、「使用されている音が限られていて、音域も狭い」というのはそのまま逆に、基礎を確実に習得するにはその方

が良いと言えるし、「つまらない」「古くさい」と感じられる右手がメロディー、左手が主要3和音による伴奏という形の曲が多いというのは、非常にオーソドックスな形であり、幼児の歌唱伴奏はこれが基本であると考えられる。また、左手がメロディーの曲や多声音楽の曲は、保育現場ではほとんど必要としない」と述べ、「我が国で長年使われ続けていたために学生が多少なりともどこかで「聴いたことがある」曲がある、ということも大いにプラスに作用している。「知っている曲」は練習の成果が自分で分かるため弾けるようになった喜びが得られるが、全然知らない曲は練習していてもそれが正しいか、間違っているか確信が持てないために、初めから取りかかる意欲が見られないからである。²⁹⁾」と述べている。

6) 「幼児音楽表現Ⅱ」の共通課題曲について

「幼児音楽表現Ⅱ」の共通課題曲(表3)については、各コース共通の課題曲であり、全学生に課している。

1年後期「幼児音楽表現Ⅱ」の[指遊び・手遊び]の課題曲は弾き歌いで、「身体表現」の科目で実際に指遊び、手遊びを学び実践するために、ピアノ個人指導の中で、これらの曲を演奏できることを目指して取り入れている。

[子どもの歌]も弾き歌いの課題曲で、季節の曲を中心に、2年生の6月に行われる保育所実習で演奏する可能性の高いと思われる曲を取り入れている。

これらの曲は、学生が弾き歌いの技能を学ぶために、ピアノ演奏だけに集中するのではなく、「歌う」ことができるよう簡易な伴奏を付け、本学で編集した併用曲集(資料集)を作成し使用している。

7) 「幼児音楽表現Ⅰ」「幼児音楽表現Ⅱ」の自由曲について

自由曲は、「幼児音楽表現Ⅰ」のA・B・Cコースでは課していない。ピアノ奏法の基礎を学習するためと、バイエルピアノ教則本を、一度は演奏しておいた方がよいとのねらいからである。

「幼児音楽表現Ⅱ」のCコース、「幼児音楽表現Ⅰ」「幼児音楽表現Ⅱ」のDコースの自由曲は、ピアノ指導担当講師と相談の上、小品を演奏することを課している。

採用試験においても、自由曲を演奏する場合があ

り、保坂(1999)は、「岐阜、愛知の保育者採用試験で、52%の保育園と25%の幼稚園がバイエル程度の基本的なピアノ曲が弾けることについて、およそ30%の幼稚園、保育園が、自分の得意な曲を弾くという課題を課している。³⁰⁾」としている。

そのため、採用試験で演奏することを考慮し、演奏時間の長い曲より、学生が曲を知らなくても楽しくて良いなと感じる曲、練習の効果を自覚でき、余裕を持って成果を発揮できる曲という観点で、演奏する曲を助言できるように、ピアノ指導担当講師で共通理解を持っている。

8) ピアノ個人カルテ

学生一人一人にピアノ個人カルテを作成し、能力別に設定されたコースの内容に従って、ピアノ個人指導を受講している。

ピアノ個人カルテを導入した目的は、以下の理由からである。

- ① 練習時間を記入することで、主体的に練習を行うように自らが振り返る。
- ② 曲の進捗を確認し、学生と教員で、情報を共有することで、学生の個性に合わせた選曲や指導ができる。さらに学生の日常の取り組み(練習時間や進捗)が、レッスンの中で評価されることが、意欲の向上につながる。
- ③ 演奏した曲を記録することにより、レパートリーを確認し、増やす。
- ④ ピアノ指導担当講師が、指導事項を記入することにより、学生が練習の際に自分で問題点を確認し、効率の良い練習をすることができる。

またピアノ個人カルテの内容は、所属クラス、出席番号、氏名、ピアノ担当講師の氏名、練習時間の記入、出欠席の確認、ピアノ指導担当講師による指導事項の記入、合格した曲のチェック(日付記入)、ピアノ個人指導における中間テスト、期末試験の演奏曲の確認、社会人基礎力の自己評価の記入(ピアノ個人指導の場合は「主体性」「実行力」「課題発見力」を5段階で自己評価する)である。

ピアノ個人カルテは1年次の開講科目「幼児音楽表現Ⅰ」「幼児音楽表現Ⅱ」を一覧として(注4)に記す。

ピアノ個人カルテの記載については、ピアノ指導

担当講師が授業ごとに出席を確認し、個人カルテに記載するとともに、学生が記入した練習時間を、教員ファイルにある個人カルテの控えに転記し、練習時間や、内容の確認に努めている。

学生の個人カルテに合格した曲のチェックや指導内容、次回までの練習課題を記入し、学生の練習の際の参考になるようにしている。図1に学生の記載を示す。

図1.

1学年			2学年			3学年			4学年			5学年			6学年			7学年			8学年			9学年			10学年			11学年			12学年			13学年			14学年			15学年			16学年			17学年			18学年			19学年			20学年			21学年			22学年			23学年			24学年			25学年			26学年			27学年			28学年			29学年			30学年			31学年			32学年			33学年			34学年			35学年			36学年			37学年			38学年			39学年			40学年			41学年			42学年			43学年			44学年			45学年			46学年			47学年			48学年			49学年			50学年			51学年			52学年			53学年			54学年			55学年			56学年			57学年			58学年			59学年			60学年			61学年			62学年			63学年			64学年			65学年			66学年			67学年			68学年			69学年			70学年			71学年			72学年			73学年			74学年			75学年			76学年			77学年			78学年			79学年			80学年			81学年			82学年			83学年			84学年			85学年			86学年			87学年			88学年			89学年			90学年			91学年			92学年			93学年			94学年			95学年			96学年			97学年			98学年			99学年			100学年			101学年			102学年			103学年			104学年			105学年			106学年			107学年			108学年			109学年			110学年			111学年			112学年			113学年			114学年			115学年			116学年			117学年			118学年			119学年			120学年			121学年			122学年			123学年			124学年			125学年			126学年			127学年			128学年			129学年			130学年			131学年			132学年			133学年			134学年			135学年			136学年			137学年			138学年			139学年			140学年			141学年			142学年			143学年			144学年			145学年			146学年			147学年			148学年			149学年			150学年			151学年			152学年			153学年			154学年			155学年			156学年			157学年			158学年			159学年			160学年			161学年			162学年			163学年			164学年			165学年			166学年			167学年			168学年			169学年			170学年			171学年			172学年			173学年			174学年			175学年			176学年			177学年			178学年			179学年			180学年			181学年			182学年			183学年			184学年			185学年			186学年			187学年			188学年			189学年			190学年			191学年			192学年			193学年			194学年			195学年			196学年			197学年			198学年			199学年			200学年			201学年			202学年			203学年			204学年			205学年			206学年			207学年			208学年			209学年			210学年			211学年			212学年			213学年			214学年			215学年			216学年			217学年			218学年			219学年			220学年			221学年			222学年			223学年			224学年			225学年			226学年			227学年			228学年			229学年			230学年			231学年			232学年			233学年			234学年			235学年			236学年			237学年			238学年			239学年			240学年			241学年			242学年			243学年			244学年			245学年			246学年			247学年			248学年			249学年			250学年			251学年			252学年			253学年			254学年			255学年			256学年			257学年			258学年			259学年			260学年			261学年			262学年			263学年			264学年			265学年			266学年			267学年			268学年			269学年			270学年			271学年			272学年			273学年			274学年			275学年			276学年			277学年			278学年			279学年			280学年			281学年			282学年			283学年			284学年			285学年			286学年			287学年			288学年			289学年			290学年			291学年			292学年			293学年			294学年			295学年			296学年			297学年			298学年			299学年			300学年			301学年			302学年			303学年			304学年			305学年			306学年			307学年			308学年			309学年			310学年			311学年			312学年			313学年			314学年			315学年			316学年			317学年			318学年			319学年			320学年			321学年			322学年			323学年			324学年			325学年			326学年			327学年			328学年			329学年			330学年			331学年			332学年			333学年			334学年			335学年			336学年			337学年			338学年			339学年			340学年			341学年			342学年			343学年			344学年			345学年			346学年			347学年			348学年			349学年			350学年			351学年			352学年			353学年			354学年			355学年			356学年			357学年			358学年			359学年			360学年			361学年			362学年			363学年			364学年			365学年			366学年			367学年			368学年			369学年			370学年			371学年			372学年			373学年			374学年			375学年			376学年			377学年			378学年			379学年			380学年			381学年			382学年			383学年			384学年			385学年			386学年			387学年			388学年			389学年			390学年			391学年			392学年			393学年			394学年			395学年			396学年			397学年			398学年			399学年			400学年			401学年			402学年			403学年			404学年			405学年			406学年			407学年			408学年			409学年			410学年			411学年			412学年			413学年			414学年			415学年			416学年			417学年			418学年			419学年			420学年			421学年			422学年			423学年			424学年			425学年			426学年			427学年			428学年			429学年			430学年			431学年			432学年			433学年			434学年			435学年			436学年			437学年			438学年			439学年			440学年			441学年			442学年			443学年			444学年			445学年			446学年			447学年			448学年			449学年			450学年			451学年			452学年			453学年			454学年			455学年			456学年			457学年			458学年			459学年			460学年			461学年			462学年			463学年			464学年			465学年			466学年			467学年			468学年			469学年			470学年			471学年			472学年			473学年			474学年			475学年			476学年			477学年			478学年			479学年			480学年			481学年			482学年			483学年			484学年			485学年			486学年			487学年			488学年			489学年			490学年			491学年			492学年			493学年			494学年			495学年			496学年			497学年			498学年			499学年			500学年			501学年			502学年			503学年			504学年			505学年			506学年			507学年			508学年			509学年			510学年			511学年			512学年			513学年			514学年			515学年			516学年			517学年			518学年			519学年			520学年			521学年			522学年			523学年			524学年			525学年			526学年			527学年			528学年			529学年			530学年			531学年			532学年			533学年			534学年			535学年			536学年			537学年			538学年			539学年			540学年			541学年			542学年			543学年			544学年			545学年			546学年			547学年			548学年			549学年			550学年			551学年			552学年			553学年			554学年			555学年			556学年			557学年			558学年			559学年			560学年			561学年			562学年			563学年			564学年			565学年			566学年			567学年			568学年			569学年			570学年			571学年			572学年			573学年			574学年			575学年			576学年			577学年			578学年			579学年			580学年			581学年			582学年			583学年			584学年			585学年			586学年			587学年			588学年			589学年			590学年			591学年			592学年			593学年			594学年			595学年			596学年			597学年			598学年			599学年			600学年			601学年			602学年			603学年			604学年			605学年			606学年			607学年			608学年			609学年			610学年			611学年			612学年			613学年			614学年			615学年			616学年			617学年			618学年			619学年			620学年			621学年			622学年			623学年			624学年			625学年			626学年			627学年			628学年			629学年			630学年			631学年			632学年			633学年			634学年			635学年			636学年			637学年			638学年			639学年			640学年			641学年			642学年			643学年			644学年			645学年			646学年			647学年			648学年			649学年			650学年			651学年			652学年			653学年			654学年			655学年			656学年			657学年			658学年			659学年			660学年			661学年			662学年			663学年			664学年			665学年			666学年			667学年			668学年			669学年			670学年			671学年			672学年			673学年			674学年			675学年			676学年			677学年			678学年			679学年			680学年			681学年			682学年			683学年			684学年			685学年			686学年			687学年			688学年			689学年			690学年			691学年			692学年			693学年			694学年			695学年			696学年			697学年			698学年			699学年			700学年			701学年			702学年			703学年			704学年			705学年			706学年			707学年			708学年			709学年			710学年			711学年			712学年			713学年			714学年			715学年			716学年			717学年			718学年			719学年			720学年			721学年			722学年			723学年			724学年			725学年			726学年			727学年			728学年			729学年			730学年			731学年			732学年			733学年			734学年			735学年			736学年			737学年			738学年			739学年			740学年			741学年			742学年			743学年			744学年			745学年			746学年			747学年			748学年			749学年			750学年			751学年			752学年			753学年			754学年			755学年			756学年			757学年			758学年			759学年			760学年			761学年			762学年			763学年			764学年			765学年			766学年			767学年			768学年			769学年			770学年			771学年			772学年			773学年			774学年			775学年			776学年			777学年			778学年			779学年			780学年			781学年			782学年			783学年			784学年			785学年			786学年			787学年			788学年			789学年			790学年			791学年			792学年			793学年			794学年			795学年			796学年			797学年			798学年			799学年			800学年			801学年			802学年			803学年			804学年			805学年			806学年			807学年			808学年			809学年			810学年			811学年			812学年			813学年			814学年			815学年			816学年			817学年			818学年			819学年			820学年			821学年			822学年			823学年			824学年			825学年			826学年			827学年			828学年			829学年			830学年			831学年			832学年			833学年			834学年			835学年			836学年			837学年			838学年			839学年			840学年			841学年			842学年			843学年			844学年			845学年			846学年			847学年			848学年			849学年			850学年			851学年			852学年			853学年			854学年			855学年			856学年			857学年			858学年			859学年			860学年			861学年			862学年			863学年			864学年			865学年			866学年			867学年			868学年			869学年			870学年			871学年			872学年			873学年			874学年			875学年			876学年			877学年			878学年			879学年			880学年			881学年			882学年			883学年			884学年			885学年			886学年			887学年			888学年			889学年			890学年			891学年			892学年			893学年			894学年			895学年			896学年			897学年			898学年			899学年			900学年			901学年			902学年			903学年			904学年			905学年			906学年			907学年			908学年			909学年			910学年			911学年			912学年			913学年			914学年			915学年			916学年			917学年			918学年			919学年			920学年			921学年			922学年			923学年			924学年			925学年			926学年			927学年			928学年			929学年			930学年			931学年			932学年			933学年			934学年			935学年			936学年			937学年			938学年			939学年			940学年			941学年			942学年			943学年			944学年			945学年			946学年			947学年			948学年			949学年			950学年			951学年			952学年			953学年			954学年			955学年			956学年			957学年			958学年			959学年			960学年			961学年			962学年			963学年			964学年			965学年			966学年			967学年			968学年			969学年			970学年			971学年			972学年			973学年			974学年			975学年			976学年			977学年			978学年			979学年			980学年			981学年			982学年			983学年			984学年			985学年			986学年			987学年			988学年			989学年			990学年			991学年			992学年			993学年			994学年			995学年			996学年			997学年			998学年			999学年			1000学年			1001学年			1002学年			1003学年			1004学年			1005学年			1006学年			1007学年			1008学年			1009学年			1010学年			1011学年			1012学年			1013学年			1014学年			1015学年			1016学年			1017学年			1018学年			1019学年			1020学年			1021学年			1022学年			1023学年			1024学年			1025学年			1026学年			1027学年			1028学年			1029学年			1030学年			1031学年			1032学年			1033学年			1034学年			1035学年			1036学年			1037学年			1		
-----	--	--	-----	--	--	-----	--	--	-----	--	--	-----	--	--	-----	--	--	-----	--	--	-----	--	--	-----	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	-------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	--------	--	--	---	--	--

の試行として、「15回のレッスンの計画を立てるための計画表を配布し、自ら考え計画し、ピアノ担当教員に提出させる試みを行っている。計画表を目安に、何をしたらよいかわからないから練習をしてこないということが減り、積極的な練習や指導を受けるという成果が表れていると実感している。³⁵⁾」としている。

いずれの試みも、学生自身の主体的な練習への取り組みを促し、自己評価することで、さらに次のレベルへ向上する足掛かりとなると考えられるのではないだろうか。

(2) クラス授業

1) 「幼児音楽表現Ⅰ」のクラス授業

保育現場において言葉を明瞭に発音することは重要だと思われる。そのため、わらべうた(表4)を教材として言葉を大切に歌いながら明瞭な言葉の発音を養うことを目的とした。また、わらべうたは身体表現をしながら歌うことも多くそれらの基礎的な能力やリズム感も養うことを目的とした。

表4.

となえ	・チュチュコッコ ・なこうか とぼうか ・きーりすチョン ・からすかずのこ ・うつつけ ・キツネをくったらうまかった ・ちびすけ ・うちのうらのくろねこ ・かれーっこやいて
レ、ド	・ととけっこー ・上みれば ・このここのこ ・どんどんばし ・あちらの森で ・もぐらどん ・さよならあんころもち ・にわとりいっば
レ、ド、ラ	・かえるとおたま ・ごちゃごちゃ ・じゃがいも ・一本橋 ・どてかぼちゃ ・竹の子一本おくれ ・チョッパーチョッパー ・熊さん ・竹やぶの中から
ミ、レ、ド	・せんべいせんべい ・ゆうびんはいたつ ・さるのこしかけ ・おちやをのみに ・ブーブーブー ・もどろもどろ
ミ、レ、ド、ラ	・あめこんこん ・ほたるこい ・わるいねずみ ・せんぞやまんぞ ・どんぶっかっか
ミ、レ、ド、ラ、ソ	・ひとつひよこが
よく知られたわらべうた	・なべなべそこぬけ ・かごめ ・通りやんせ ・あぶくたった ・あんたがたどこさ ・花いちもんめ

2) 「幼児音楽表現Ⅱ」のクラス授業

「幼児音楽表現Ⅱ」のクラス授業では、無理のない自然な発声法での歌唱および季節の歌を通して行事などの意味も理解し保育者としての豊かな音楽的感性を育てることを目的とした。また毎授業時 2～4名のペアやグループで人前に立ち歌唱やあそびうたなどを発表させた。以下、(表5)に毎授業時のねらいと内容を示す。

表5.

	ねらい	主な授業内容(歌唱など)
第1回	秋の歌を調べる。歌う。	「どんぐりころころ」
第2回	秋の歌を歌う。秋を感じる感性の育成。	「やさしいグー・チーパー」「村祭り」「まつぼっくり」など
第3回	秋の行事の歌を歌う。	「つき」「運動会」「はしるのだいすき」「おにぎりにぎろう」など
第4回	秋の歌をアカペラで歌う。	「こおろぎ」「もみじ」「木の葉」
第5回	夏の歌を調べる。秋を感じる感性の育成。	「カミナリドン! ドン!」「はなび」「たなばたさま」など
第6回	ラテンのリズムを学ぶ。	「とんでったバナナ」を歌う。リズム練習。
第7回	春の歌を調べる。春を感じる感性の育成。	「いちねんせいになったら」「こいのぼり」「うれしいひなまつり」など
第9回	タンブリン、カステネット、鈴の奏法を学ぶ。	「小僧の行進」リズム練習。
第10回	リズムアンサンブルを学ぶ。	「さよならぼくたちの幼稚園」器楽アンサンブル、歌唱
第11回	冬の歌を調べる。冬を感じる感性の育成。	「お正月」「ゆきのべんきやさん」「もちつき」「まめまき」など
第12回	クリスマスの曲を学ぶ。	「赤鼻のトナカイ」「きよしこの夜」「あわてんぼうのサンタクロース」など
第13回	子どもが好きな歌などを学ぶ。	「犬のおまわりさん」「森のくまさん」「夕焼け小焼け」など
第14回	歌の試験の準備をする。	「ゆきのべんきやさん」「もみじ」「夕焼け小焼け」
第15回	歌の試験を行う。	課題曲を1曲アカペラでソロで歌う。

4. ピアノの練習時間と課題曲の達成率との関連を測定

ピアノ学習においては個人の差が大きく反映するため、ピアノ個人カルテから学生個々のピアノの練習時間を測定し、主体的なピアノの練習とのかかわりを探った。

また、学生にとってより効率的な指導を目指すためピアノ指導に関わる非常勤講師の勤務年数と学生の練習時間と達成率をグラフに表し相関関係を探った。

ピアノ個人カルテに記載されている練習時間(15週 105日分)の1日の平均練習時間と各コースにおける課題の達成率との関連を見る。

「幼児音楽表現Ⅱ」の各コースの課題曲数を分母とし、1年後期で合格した曲を分子として達成率を算出した。

また、教員の年代や本学科での指導経験年数によって、学生個人の練習時間の増減や達成率の差異がみられるのかも調査した。

対象参加者に対して、研究の趣旨、内容、使用する情報、匿名性の確保について口頭で説明し、同意を得た。

なお、ピアノ個人カルテにおいては学生やピアノ指導担当講師の個人情報が特定されないように一部、非公開としている。

(1) 学生のピアノ個人指導における練習時間と課題の達成率について

図2で、練習時間と課題の達成率について、コース別の分布図を示す。

図2.

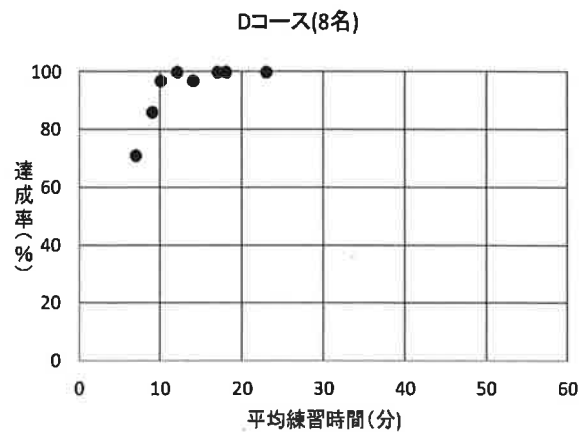
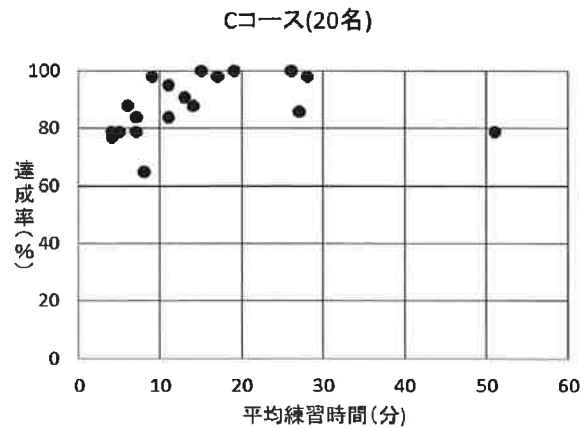
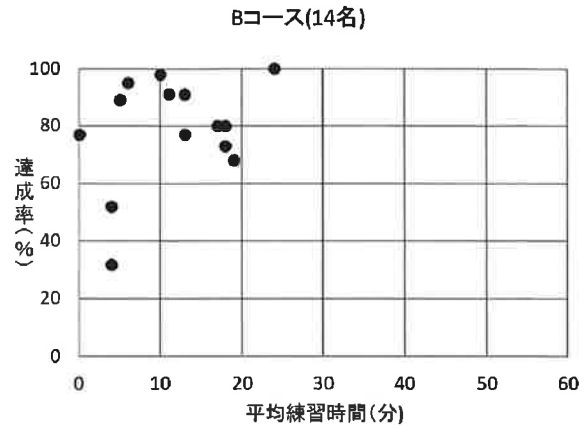
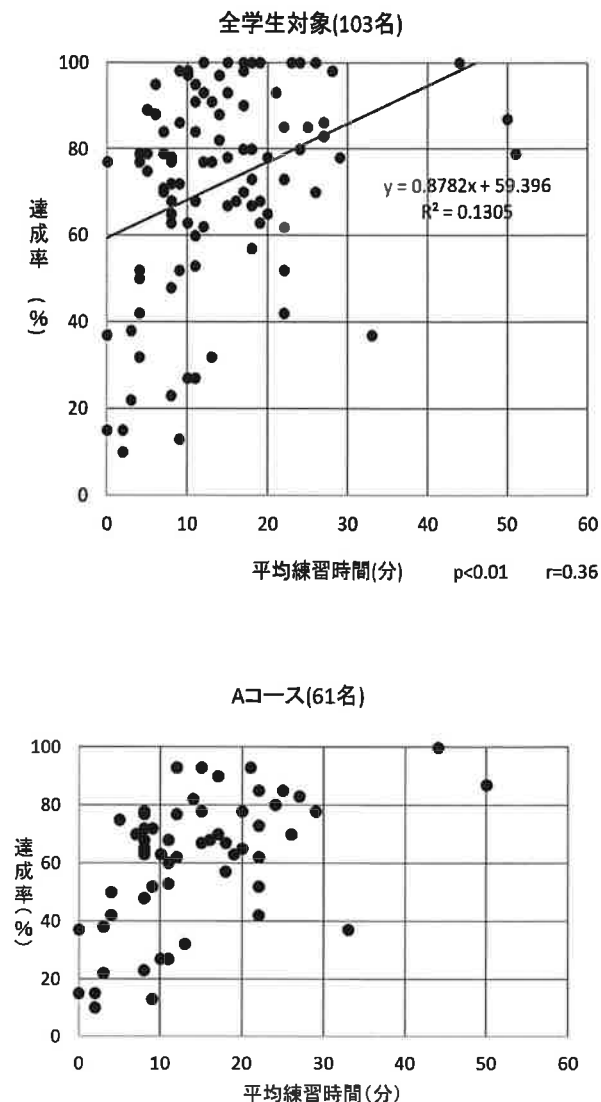


表6は、コース別の練習時間と達成率の関連を項目別に示したものである。

表6.

コース	全体	A	B	C	D
人数(人)	103	61	14	20	8
平均練習時間(分/1日)	14	14	12	15	14
課題の達成率(%)	72	62	79	88	94
達成率90%以上の学生(%)	25	10	29	45	75
達成率90%以上の学生の練習時間(分/1日)	17	21	13	18	16
達成率60%未満の学生(%)	21	33	14	0	0
達成率60%未満の学生の練習時間(分/1日)	9	10	4	0	0
1日の練習時間25分を超える学生の達成率(%)	84	77	100	93	100
1日の練習時間10分未満の学生の達成率(%)	60	50	69	81	79
1日の練習時間 0～10分未満(%)	38	39	36	40	25
1日の練習時間 10～20分未満(%)	40	34	57	35	63
1日の練習時間 20～30分未満(%)	18	21	7	20	12
1日の練習時間 30分以上(%)	4	5	0	5	0
練習時間 最小値(分/1日)	0	0	0	0	7
練習時間 最大値(分/1日)	51	50	25	51	23

(2) ピアノ指導担当講師の勤務年数と学生の練習時間(1日)と課題の達成率について

本学幼児教育学科では2017年度(平成29年度)において、「幼児音楽表現Ⅱ」(1年後期)のピアノ指導担当講師として、津島を含め10名が指導に当たった。1学年3クラスで、1クラスに7名のピアノ指導担当講師が配置されている。

勤務年数を4つのグループ(0～5年未満、5～10年未満、10～20年未満、20年以上)に分けて、担当した学生の練習時間(1日)と課題の達成率を以下に示す。

図3はピアノ指導に関わる講師の勤務年数と学生の練習時間と達成率をグラフに表し相関関係を視覚化した。

表7は、非常勤講師の勤務年数と学生の練習時間と達成率の関連を項目別に示したものである。

勤務年数別(0～5年未満、5～10年未満、10～20年未満、20年以上)に集計を行ったが、平均練習時間も達成率も差が少なく、有意な結果が得られなかったと判断した。

勤務年数が20年以上の講師については、A・Bコースの学生において、「幼児音楽表現Ⅱ」のピアノ個人

図3.

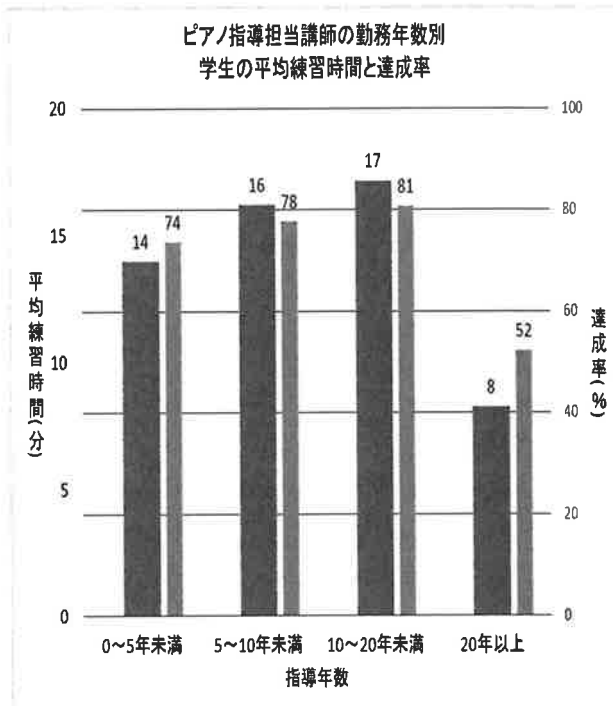


表7.

勤務年数(人数)	0～5年未満(4名)	5～10年未満(2名)	10～20年未満(2名)	20年以上(2名)
担当学生数(人)	33	24	24	22
平均練習時間(分/1日)	14	16	17	8
課題の達成率(%)	74	78	81	78

コース	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D
コース別の学生数(人)	18	4	7	4	15	3	5	1	13	3	6	2	15	4	2	1
平均練習時間(分/1日)	15	7	15	15	17	17	14	14	17	18	19	13	8	8	8	7
課題の達成率(%)	63	85	81	99	72	77	93	86	72	89	93	86	52	41	67	88
1日の練習時間 0～10分未満(%)	52				13				21				64			
1日の練習時間 10～20分未満(%)	30				63				42				27			
1日の練習時間 20～30分未満(%)	9				21				37				9			
1日の練習時間 30分以上(%)	9				3				0				0			
練習時間 最小値(分/1日)	0				8				7				0			
練習時間 最大値(分/1日)	51				44				29				25			

指導のクラス編成の際に、「幼児音楽表現Ⅰ」での平均練習時間の短い学生、達成率の低い学生を配属しているので、平均練習時間と達成率の数値が低く表れている。

ピアノ指導担当講師の勤務年数は、学生の主体的な学びに影響を与えるのではなく、指導・助言の内容が重要なのではないと思われる。

(3) 練習時間と課題の達成率

今回の調査で、平均練習時間と課題の達成率には有意な正の相関がみられ、練習時間が長いと課題の達成率が高いことが示唆された。

岩口（2016）の研究では、「演奏成績（演奏点）」は、練習日数、報告書提出率、練習に対する全体の自己評価や、練習方略全体の順守率との間に正の相関が示された。また練習報告書の提出率が高いほど、練習日数や練習総時間が多くなり、演奏点や練習に対する全体の自己評価や、練習方略全体の順守率も高くなることが示されたことから、毎回のピアノ練習時に練習報告書を記入しそれを提出させることは、学生のピアノ練習方略とメタ認知的自己調整への連動と内省を促し、そのような自己調整学習の習慣が成績にもプラスに反映されるということが明らかになった。また演奏点は練習日数とは正の相関が認められたが、練習総時間とは相関がなかったもので、同じ時間練習をするならまとめてやるより、何日かに分割する方がよいということも示唆された。³⁶⁾と述べている。

各コースの平均練習時間と課題の達成率を比較すると、1日の平均練習時間（分）では、Aコース 14分、Bコース 12分、Cコース 15分、Dコース 14分となり、大差はなかった。

また、課題の達成率（％）は、Aコース 62％、Bコース 79％、Cコース 88％、Dコース 94％となった。

練習時間では、ほぼ差がないが、達成率は、進捗が進んでいる学生のほうが高くなっていることがわかった。このことは、練習方法や音楽の知識が身に付いているので、効率の良い練習を行っていると考えられるのではないだろうか。

先行研究で、練習時間について、木村・篠原(2017)は、「練習を「ほとんどしない」学生が10.3%、1回あたりの練習時間については、「10分未満」が6.3%、「10～30分未満」が30.8%、「30分～1時間未

満」が39.2%、「1時間以上」が20.3%であり、授業シラバスに「授業とは別に毎週180分程度の自習を行うこと」と示されているので、この練習頻度・時間の実態では十分であるとは言えず、授業者として、学生が課題意識をもちながら主体的にピアノ練習に取り組めるような指導の改善を図ることが必要である。³⁷⁾と記している。

この研究は小学校教員養成におけるピアノの練習時間について述べているので、比較はできないが、本学でも1日の練習時間（0～10分未満）が4割を占めている現状があり、学生に課題意識を持たせながら、主体的に練習に取り組めるような指導の改善を図ることが必要であると考えられる。

90%以上の達成率の学生の練習時間は、各コースとも平均練習時間を上回っていた。特にAコースは平均練習時間の1.5倍であり、練習に時間をかけていることが分かった。

熱心に練習していると考えられることもできるが、譜読みや演奏技術の獲得、音楽知識の不足から苦勞しているとも考えられるのではないだろうか。

達成率60%未満の学生の練習時間は、平均練習時間の3～6割で、C・Dコースにはいなかった。

平均練習時間が25分を超える学生と、10分未満の学生の達成率を比較すると、25分を超える学生の達成率が、20～50%上回っていた。

各コースの平均練習時間で、一番多いのは、10～20分未満であった。

「幼児音楽表現Ⅰ」「幼児音楽表現Ⅱ」とともに2017年度（平成29年度）シラバスにおいてはクラス授業と合わせて予習・復習として45分（1回の授業につき）と規定している。

1日の平均練習時間で見ると、教員が望む平均練習時間の半分以下という状況であった。

もちろん単純に練習時間が長ければ、必ず上達するというわけではないのだが、まずは実質的な練習時間を増やし、主体的に練習に取り組むことができる指導・助言の改善を探ることが重要であると思われる。

次に主体的に練習に取り組むために、どのような練習方法が好ましいのかを考えた。

筆者（津島）の考える効率的な練習方法は、

- ① 基礎練習 短くても良いので、ウォーミングアップも兼ねて音階やアルペジオを演奏する。
- ② 片手で練習 左右ともに満遍なく行う。ゆっく

りと正確な音とリズムを意識する。弾きながら音名や歌詞を歌っても良い。なるべく止まらないことを意識する。

- ③ 両手で練習 いきなり速いテンポで弾かない。間違いなく演奏し、演奏が止まらないテンポでゆっくりと確実に楽譜を見ながら弾く。
- ④ 演奏が難しい部分の反復練習をする。その場合、その部分の前後も続けて練習する。
- ⑤ 少しずつテンポを速くする。間違えたり止まったりしたら、再度、テンポを遅くして練習する。
- ⑥ ある程度弾くことができるようになれば、ミスをして良いので、テンポを少しずつ速くする。②から⑥を繰り返して練習する。
- ⑦ 間違えても止まらずに、全体を通して弾いてみる。

他にも様々な練習方法を試みているが、基本は以上のような方法が考えられるのではないだろうか。

先行研究で、鈴木(2017)は、練習方法について、「練習内容(手順)」「方法」「目的」「理由」の4つの項目を示し、具体的な練習方法の提示を行っている。その中で、「ピアノが弾けるようになるための練習でありながら、「読む」「歌う」ことを多く取り入れている理由は、声に出して「読む」ことで楽譜に早く慣れることができることと将来的に出てくる「弾き歌い」への準備のためである。言葉ではなく音名唱ではあるが、手元の鍵盤ではなく楽譜を見ながら弾くことを身に着けることも含めて、「弾き歌い」はピアノ実技と歌うことをバランスよく学ぶことが好ましいと考えている。³⁸⁾」としている。

これは、幼児教育・保育の現場では弾き歌いを演奏する可能性が高いことから、ピアノ練習の段階から歌うことを意識した方が良いと考えられ、筆者(津島)の考える練習方法②で述べた「弾きながら音名や歌詞を歌っても良い。」と通じる点があると思われる。

また小森(2010)は、学生へのアンケートの自由記述において「練習時間が少ない原因として、「やる気が出ない」、「気が進まない」、「練習が嫌い」等、ピアノ学習に対して消極的な姿勢が見られた。そして、「学習している曲が好きになれない」、「つまらない」等の回答も目立った。教員側から与えることばかりではいけないが、学生が興味を持つ楽曲を選定し、ピアノに対する学習意欲をかき立てる授業展開及び授業内容を今一度考える必要があると考え

られる。³⁹⁾」と述べている。

ともすればピアノの練習は技術の獲得に偏り、それが練習することや演奏することの苦しみにつながることもなると思われる。しかし、それでは音楽を人前で楽しみながら表現することができることはつながっていかないであろう。一方で自分が好きな曲だけを、ただやみくもに弾くのでは、技能を獲得し上達することは難しいであろう。練習方法②から⑥を繰り返すことは、主体的に自ら問題意識を持ち、一つずつ課題を克服して次の目標に向かう練習ができると考えられる。さらに技術の獲得と、音楽を楽しんで表現することという2つの要素が含まれた効果的な練習方法を探る必要があるのではないだろうか。

練習の内容について、村上(2012)は「1日にどのくらい練習したらよいですか?」との質問に、「練習時間というよりも内容を重視してください」と答え、30分の練習時間の配分として、10分間の苦手な部分の練習と、20分間の全体練習、得意な部分の練習または他の曲の練習という時間配分を提案している。⁴⁰⁾ また、三木(2018)は、1時間の練習で、基礎練習(10分)、曲全体の練習(5分)、難しい部分の反復練習(20分)、再び曲全体の練習(5分)、演奏の録音と確認(5分)、全体の練習または部分練習(15分)という練習の流れを提案している。⁴¹⁾

これらの練習方法は、保育者養成のピアノ練習方法として提案されたものではないが、短い時間で様々な練習を繰り返し行い、学習者が自身の進歩を感じることができ、次の目標に向かって主体的に練習に取り組むことができる方法であると思われる。

もちろん練習方法は千差万別であり、絶対にこの練習方法が良いといえるものはないと考えられるが、学生一人一人に合った練習方法を提案、助言していくことは、ピアノ指導講師の役割なのではないだろうか。

また指導者として、音楽(ピアノ)で表現することは楽しいことだと伝えること。学生の技術レベルとともに学生一人一人の個性に合わせた興味のある曲を提案、指導できること。練習時間の増加や練習方法の工夫などの普段の取り組みや意欲に向上が見られれば、正しく評価し認めること。この日々の指導の積み重ねが、学生の意欲や向上心を育て、主体的に取り組む姿勢を築いていけるのではないだろうか。

吉村(2014)は「学生に現在の自分自身の評価基準を知らせることにより、自分自身がどのくらい弾けるようになったのか、上達したのかを自覚させることが肝心である。そして、それを積み重ねることにより、達成感や満足感が得られることになる。この小さな積み重ねを経験していくことによって、誰かとの比較ではなく、自分自身の進歩を感じることができ『ピアノが弾けるようになった』という喜びが実感できるのではないだろうか。それによって、『もっとピアノが上手になりたい』という思いが生じ、自主的に練習する意欲が高まり、練習する→弾けるようになる→さらに練習するという循環ができあがると考えられる。今後、ピアノ指導には、基礎技術の習得に偏ることなく、学生に達成感や満足感をもたせること、さらに自己効力感を育てることが重要であると考え。この自己効力感を育てることは、ピアノの学習のみにとどまらず、保育者になるためのあらゆる勉学へのモチベーションの向上につながっていくのではないだろうか。⁴²⁾」と述べている。

今後の課題として、ピアノ個人カルテが、学生の主体性ある学びと練習につながるよう模索する必要があると考えられた。

5. 授業実践研究

(1) 方法

対象：本学の幼児教育学科の女子学生

1年生 103名

期間：2017年9月6日から2018年1月12日

演習授業名：「幼児音楽表現Ⅱ」

授業形態：1コマ90分授業のクラス授業と一人あたり18分のピアノ個人指導

計14回（第1回～7回、9回～15回）

ピアノ個人指導は津島が中心となり、非常勤講師を含め7名で行い、クラス授業は本多が行った。

ピアノ個人指導、クラス授業ともに32名、36名、35名の3クラスに分け実施した。

ピアノ個人指導は、各クラス7つのグループに分け、グループごとに学生が一人ずつピアノ指導室で個人レッスンを受講した。

学生は、各自、能力別のコースで設定されたピアノ曲と弾き歌いの課題を練習し個人指導を受ける。レッスンで問題点があれば個人カルテの指導事項に

記入され、その指導事項を参考に次回までに練習して改善する。合格すれば次の課題へと進むという内容である。

第1回目の授業時に、個人指導を受ける際の注意事項や個人カルテの記入方法、中間試験(8回目)の振り返りと期末試験の実技試験の内容を伝えた。

以下にピアノ個人指導のねらいを述べる。

- ① ピアノ演奏の技能を向上する
- ② 「指遊び・手遊び」「子どもの歌」の弾き歌いの楽曲を知り、弾いて歌うことができる
- ③ 実習での演奏や、クラス全員の前で演奏できるピアノ演奏や弾き歌いの能力を獲得する

①のピアノ演奏の技能を向上するねらいとは、「幼児音楽表現Ⅰ」で培った音楽力を踏まえ、獲得した能力をさらに向上させるため、自ら工夫して練習し学ぶ姿勢を身に着けたいということである。ピアノ演奏の向上は、毎日の練習の積み重ねの結果なのである。②のねらいは、ピアノ演奏と「歌う」ことが同時にできる能力を身に着け、レパートリーを増やすということである。③のねらいは、中間(8回目)の振り返りや期末試験での演奏、個人レッスンで講師に指導を受ける体験を通して、人前で自分の実力を発揮した演奏ができるよう自信を得るということをねらいとしている。

クラス授業は、毎回90分間各クラス同じ内容で14回実施した。まず、第1回目の授業時に4～5名のグループを決め、季節の歌や行事などの調べ学習、グループ発表などをこのグループで行うことを伝えた。また、毎授業時ピアノ個人指導のため各グループごとに一人ずつ18分間クラス授業をぬけるため、ぬけた時間の授業説明をグループ間で行うことを伝えた。

以下にクラス授業におけるねらいを述べる。

- ① 歌唱は無理のない自然な発声法で行う
- ② 季節の歌の歌詞や行事などの意味を理解する
- ③ 人前で歌う時の姿勢、態度などをクラス全員で共有し合いお互いに良いところを取り入れ、自身の表現に活かす

ねらい①の無理のない自然な発声法とは、幼児音楽表現Ⅰで培われた日本語を自然に歌うわらべうたの歌唱から、童謡や唱歌の歌詞を理解し感じながら歌うということである。園部（1975）は『うたう』ということは、音楽表現の基本的な生命である⁴³⁾「子ども自身の感情表出のための音楽としては、まず、『歌』からはじまるのだ⁴⁴⁾」と述べ、「表現の根底に、子どもたちの音楽に対する内面的な共感、あるいは子どもたちのよろこびがあるかどうかということである。⁴⁵⁾」と述べている。またハンガリー一少年少女合唱団指揮者であったチャーニー氏は子どもの発声について「技巧で育てるよりも、子どもたちの自然の声を、音楽のよろこびとともに育てることです⁴⁶⁾」「子どもは、ひとりひとり、独自の肉体をもち個性をもっているのと同じように自然の声をもっている。それを早くから技巧で育てようとすることは、子どもの自然発声の成長を、外部からおとなに近づかせることであり、個性をなくさせてしまうことだ⁴⁷⁾。」と述べている。これらは、いずれも子どもを対象とした言葉だが、乳幼児を対象とする保育者養成の学生が子どもと同じように歌唱のプロセスを経験することも重要だと考え、無理のない自然な発声法とした。②のねらいは、歌詞や行事の意味を理解することで、より深く文化に興味を持ち、指導できることを目的とした。③のねらいにおいては、毎回の授業において人前でどのように自身が表現すればよいかを互恵的な協力関係において学ぶ。そして緊張感を緩和することも目的とした。

クラス授業時には毎回クラス全員の前で2～4人のペア、あるいはグループで歌唱発表を行った。

最終授業時には一人ずつクラス全員の前で歌唱試験を行った。

また、最終授業時はクラス授業、ピアノ個人指導ともに、授業の振り返りの感想を自由に記述させ、社会人基礎力に関する自己評価アンケートを5件法で行った。

(2) 質問紙調査

本学が積極的に取り入れている社会人基礎力の中から、前に踏み出す力《主体性》《実行力》、考え抜く力《課題発見力》《創造力》、チームで働く力《発信力》《傾聴力》《情報把握力》《規律性》、以上8つの能力要素のアンケート調査を5件法で行い、これ

らの能力要素がどのように育まれたのかを把握することを目的とした。（表8）

また、ピアノ個人指導、クラス授業の振り返りの感想を自由記述で求めた。

表8.

社会人基礎力の能力要素		具体的行動事例	自己評価
前に踏み出す力	主体性	・技術の習得のために自ら練習をすることができる。 ・授業の中でわからないことや疑問があればそのままにせず質問して解決することができる。	5・4・3・2・1
	実行力	・困難があっても目標を変更せず到達することができる。	5・4・3・2・1
考え抜く力	課題発見力	・苦手なことも諦めず課題を見極めることができる。 ・予習・復習の際に学習上の問題点を考えて取り組むことができる。	5・4・3・2・1
	創造力	・固定観念に捉われることなくいろいろな方向から考えることができる。	5・4・3・2・1
チームで働く力	発信力	・自分の感じたことや、考えを発表することができる。	5・4・3・2・1
	傾聴力	・歌唱・グループ発表を通して、意見交換や自分の意見を述べる事が4できる。	5・4・3・2・1
	状況把握力	・良い授業を作り上げるため、クラス全体の状況を把握することができる。	5・4・3・2・1
	規律性	・自分の都合を優先することなく集団のルールを守ることができる。	5・4・3・2・1

5:よくできた 4:できた 3:まあまあできた 2:あまりできなかった 1:できなかった

(3) 手続き

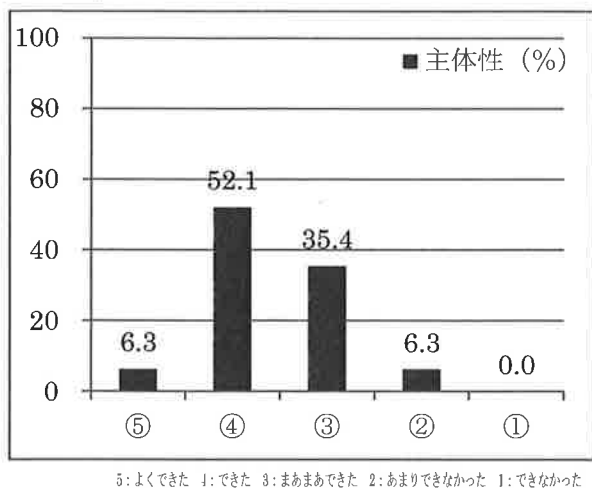
2018年1月10日、12日の最終授業時に質問紙を配布し、調査を実施した。その結果、95名の回答を回収することができた。質問紙の内容は8つの能力別にグラフに表した。また、自由記述から主体性に関係すると思われる記述を取り出し考察を行った。

6. アンケート調査結果

社会人基礎力の能力要素《主体性》の5件法でのアンケート結果を以下の図4-1に示す。

なお本研究は主体性に着目しているため実行力、課題発見力、創造力、発信力、傾聴力、状況把握力、規律性の結果は（注4）に示す。

図 4-1.



主体性の項目では全体の約半数 52%が「できた」35%が「まあまあできた」との回答であった。「できなかった」と答えた学生はいなかった。差はあるものの学生が主体性をもって音楽授業に取り組んでいたと思われる。

以下、代表的な学生の自由記述を示す。

ピアノ個人指導に関する記述

- ・バイエルもただその曲を弾けるようにするのではなく、指の使い方、スラー、強弱などその曲に示されている記号を見てそのように弾こうと努力した。
- ・1日1回はピアノをやろうと思う。
- ・ピアノは毎日練習するように心がけた。これからも継続してピアノの練習を頑張って、弾くことのできる曲を増やしたい。
- ・自分で時間をつくってなるべく毎日、少なくともいいから練習をしようと思う。
- ・計画通りに進まなかったけど、初心者なので頑張って家で練習した。これからはもっと練習して、計画通りに進めていけるように頑張りたい。
- ・これからも練習し続け、目標を達成したいと思う。
- ・大学に残って練習する習慣がついた。技術も知識もすごく上がったと思う。
- ・これからも練習して実習などで急に「何か弾ける？」と聞かれた時にあせらずに弾けるようにしていきたい。
- ・今まではできないこと、苦手なことは後回しにしたり、やらなかったりしていた、楽譜も読むことができなかった、でもだんだん読めるようになって、楽しいと思えたのでこれからも練習をしっかりとしようと思う。
- ・練習していくうちに弾けるようになったことが嬉しかった。今は難しいものも多いけどあきらめず頑張りたい。

以上のことから、自分なりにピアノの練習を進めることで結果を得られると自覚できたこと、ただ音符を弾くだけではなく指番号や強弱記号などにも気を配り努力したことが見て取れた。また目標を定め練習時間を確保するなど主体的なピアノ学習への向上心がうかがわれた。

クラス授業に関する記述

- ・今までは緊張したり、恥ずかしくてボソボソしか歌えなかったけど、クラスの前で歌ったりすることで恥ずかしいと思うことが減った。そして笑顔で歌う、姿勢を意識するなど次の課題も見つかった。
- ・最初は全然、前で発表するのも得意ではなく、歌う時も声が小さく緊張していたけれど。だんだん授業を重ねていくうちに、恥ずかしさもなくなり、声も出るようになり、自分に自信が持てるようになった。
- ・前に出て発表することや、歌うことが苦手だったが、この授業を受けていると次第に自信を持ち、明るく表情も硬くならないようにしようと努力することができ、一つ成長することができた。
- ・保育者になったら歌うことはしょっちゅうあると思うけど、自信をもって歌うことが大切だと学べた。
- ・人前で表現する事は、これからとても必要になってくるし、もっと自分らしく表現していけたらさらに自分のレベルも上げられていくと思うので今よりもっと努力して出来ることを増やしていけたらいいと思う。
- ・人の前に立って歌うのが苦手な緊張をとてもしちゃうのですが、この授業でみんなの前に立って歌うことが沢山あり、少しは苦手意識がなくなってきたと思います。この経験を活かし実習に臨みたいと思う。
- ・音程や笑顔で歌うことに気を付け、元気よく歌えるように努力した。
- ・歌うことや前で発表することは、将来の仕事で必

ず必要になることなので、もっと今より堂々とすることを心がけていきたい。

- ・前に立って歌うということは、普段あまりやらないから少しでも多くできたらいいと思う。
- ・音程が難しい部分もあり、今後努力してきちんと歌いたいと思う。
- ・前で歌う緊張感や不安な気持ちを知ることができた。それをいかに乗り越えて発表をしっかりと行うかを学ぶことができた。授業ではやってない曲にも挑戦しレパートリーを増やしたいと思う。
- ・声量が小さいので、歌をたくさん歌い、子どもたちにしっかり聞こえる声で歌えるようにしたい。歌い方や、姿勢に気を付けて緊張しても人前でしっかり歌えるように練習していきたいと思う。
- ・口を大きく開けることが苦手なので意識して歌えるようにしたい。
- ・クラス全員の前で歌を歌う経験がなかったので良い経験でした。緊張をするのは当たり前であって、その緊張をどう自分の中で保っていくべきかが発見できた。
- ・人前に立つと自信がなくなり、表情も暗くなってしまうので、自信をもってへたでもしっかり歌うことを心がけたい。

以上のことから人前で歌うことへの意識が高くなり、緊張感が軽減されたと思われた。また、自分に自信をもつことが大切だということや表情など表現方法も重要であることに気付いていることが推測された。

保育者としての観点に関する記述

- ・保育者になるための技術をもっとつけていきたいと思う。
- ・季節ごとに歌を歌っていくことで、自分の知らない歌を知ることができたり、「こんな歌があるんだ」と新たな発見をすることができて楽しかった。レパートリーが増え、さらに楽しくなった。この経験を活かして子どもたちと音を楽しみたいと思う。
- ・保育者になるためには人前に出ることを恥ずかしがっていてはいけないと思うのでこれからも頑張りたい。
- ・保育者になった時に子どもたちにたくさんの歌を教えられる保育者になりたい。

- ・保育者を目指す上で音楽はとても大切だと思うので、これからは身に付けたことを忘れないように頑張りたい。
- ・保育の現場ではピアノはもちろん前で歌ったり、踊ったり主体性が大事になってくるので、緊張しても自分を信じてやれるようにしたい。
- ・子どもたちの前で堂々と歌ったり、演奏できる保育者になりたい。
- ・季節の歌を調べて歌ったりしたので、将来役に立つと思う。
- ・季節や行事の歌をたくさん歌って、知らなかった曲も知ることができ、現場で働くようになった時に子どもたちにたくさん教えてあげたいと思った。
- ・笑顔で上手に歌える楽しい先生になりたい。
- ・季節の曲もたくさん学び、自分が保育者という立場になった時、子どもたちと一緒に歌いたいなど思った。

以上のことから表現力豊かに子どもの前で行うことの大切さ、そして季節の歌や行事の意味を知ることによって季節感や文化により興味を持ち、子どもに伝えたい、共有したいなど将来の保育者としてのイメージを持ったのであろう。ピアノ学習や音楽表現以外にも保育者としての観点が養われていたのではないかと考えられた。

7. まとめ

経済産業省は「人間は目標を生み出す存在である」という点でコンピューターとは異なり、経験や知識を再構成してさまざまな問題を解決できる。人間は生きている以上、おのずと目標を生み出してしまおう。これが『主体性』の機能と言える。人間は目標を持つと、自分が持っている知識や新たに獲得する知識を、目標のもとに組み換える。したがって、ある目標を達成すべく得た知識は、『主体性』を強める働きをする。目標の達成は、いわば『やればできる』『自分が働きかければ効力が表れる』という基本的な実存感覚とでもいうべき感覚（自己効力感）につながる点で、非常に重要だ⁴⁰⁾と説明している。

本研究では音楽学習における主体性を、「自ら進んで目標を定め、その目標に向かいあきらめずに努力すること、そして音楽を人前で楽しみながら表現することができる。」と定義した。経済産業省が説明する経験とは、ピアノ学習の練習時間、すなわち

ピアノを練習し経験すること、と考えられるのではないだろうか。また知識とは、楽譜にかかれてある記号など曲をより深く理解し演奏できるようになることと考えられないだろうか。その経験と知識が重なることでピアノの練習の大切さや、曲の深み、面白さなど音楽の世界が広がり、音楽への向上心が刺激されるのではないだろうか。この曲が弾きたい、ここまで弾けるように頑張るなど目標を生み出すのであろう。そして努力し、達成感を得るなど「やればできる」という自己効力感につながる。それが音楽における主体性を強めると考えられるのではないだろうか。

また、音楽を人前で楽しみながら表現することは、「自分が働きかければ効力が表れる」の言葉につながると考えられないだろうか。楽しんで音楽を表現していることを働きかければ、共感し聴いている側が楽しい気持ちや、一緒に楽しく音楽したいなど、みんなが楽しめる音楽になるのではないだろうか。このような働きかけは保育者に必要とされるであろう。しかし今回の結果から学生が楽しみながら音楽を表現するためには人前で経験がさらに必要だと思われる。

本研究ではピアノ個人指導と、歌唱に重点を置いたクラス授業での「主体性」の考察を行った。授業において主体的に学ぶ活動は取り入れられており、学生たちの主体性の強さは一定ではないが発揮されていると推測された。今後はさらにピアノ個人指導とクラス授業相互の音楽授業を研究し、社会人基礎力の基盤でもある「主体性」を培い学生がさらに主体的に音楽授業に臨めるよう授業内容を研究することが課題である。

参考・引用文献

- 1) 経済産業省社会人基礎力. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> (2018年5月5日)
- 2) 経済産業省『社会人基礎力 育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために』経済産業省編 朝日新聞出版, 002 (2010)
- 3) 経済産業省社会人基礎力. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> (2018年5月5日)
- 4) 前掲書 2). 「社会人基礎力は基礎学力、専門知識、人間性をつなぎ循環的に向上する」, 003
- 5) 前掲書 2). 「大学教育を通じた『社会人基礎力』の育成・評価モデルの開発～経済産業省の取り組み～」p.III
- 6) わくわくキャッチ! みんなの教育. 社会人基礎力 30選. <https://www.wakuwaku-catch.com/授業30選実践事例集/> (2018年5月5日)
- 7) 経済産業省. 社会人基礎力育成グランプリ. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/gp.html> (2018年5月5日)
- 8) 明鏡国語辞典 第二版大修館書店 (2011)
- 9) 経済産業省. 社会人基礎力に関する研究会—「中間とりまとめ」—. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf> (2018年5月5日)
- 10) 愛知学泉短期大学『無限の可能性への道 社会人基礎力を育む学泉ノート』, 3
- 11) 前掲書 2). 「主体性 —人に備わった本質的な要素であり、他の能力要素の基盤にも」, 040
- 12) 小倉隆一郎「ML 授業におけるレッスン・カリキュラムの見直しとその効果」教育学部紀要 立教大学教育学部 第13集, 41 (2009)
- 13) 實野みどり「幼児保育学科におけるピアノ演奏能力の習得状況についての調査と考察」国際研究論叢 大阪国際大学紀要 20(1), 89 (2006)
- 14) 長澤順・山崎由美子 (ほか)「本学保育者養成課程におけるピアノ教育の現状と課題」、作大論集 (6), 195 (2016)
- 15) 篠原万喜子「本学における保育者養成のためのピアノ教育について —就職試験の課題をとおして—」、横浜女子短期大学紀要 11, 79 (1996)
- 16) 宮脇長谷子「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題 —養成校へのアンケート調査を通して—」静岡県立大学短期大学部研究紀要 (15-W), 6 (2001)

- 17) 小森光紗「学生の学習意欲を高めるピアノ教育の一考察 —J.ブルグミュラー「25の練習曲」の指導を通して—」 埼玉純真短期大学研究論文集第3号, 51 (2010)
- 18) 平松愛子「ピアノ学習への意欲が向上する指導法について ～1年次前期の取り組みから～」 近畿大学九州短期大学研究紀要 41, 45 (2011)
- 19) 中村礼香「保育者養成校における学生のピアノに関する意識調査」、鹿児島女子短期大学紀要第52号, 104 (2017)
- 20) 武田宏子『ピアノ・レッスンQ&A』、ムジカノヴァ、株式会社音楽之友社, 40-41 (1983)
- 21) 徳富聖子・安原雅之「ピアノ教則本の比較研究に向けて」、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第18号, 75-85 (2004)
- 22) 三好優美子「バイエルピアノ教則本 抜粋テキストにおける編纂についての調査報告」、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要 第45号 (2010)
- 23) 小倉隆一郎「幼児教育および小学校教員養成課程におけるピアノ基礎技能テキストの考察」、「教育学部紀要」第47集、文教大学教育学部 (2013)
- 24) 兵藤恭子「保育者を目指すピアノ初心者が『バイエルピアノ教則本』で学べる事」、千葉敬愛短期大学紀要第39号 (2017)
- 25) 柏瀬愛子・牛田幸子「ピアノ教則本「バイエル」について 分析とその活用」、名古屋女子大学紀要 32, 217 (1986)
- 26) 保坂恵美「保育者採用試験を通して見るピアノ指導のあり方：岐阜愛知の特徴に着目して」、東海女子短期大学紀要 25巻, 85 (1999)
- 27) 萩原美代子「幼児教育学科のピアノ指導法についての研究」、武蔵野短期大学研究紀要 7, 45-46 (1993)
- 28) 久保節子「ピアノ実技指導のための教材研究 バイエルとブルクミュラーの検証と考察」、千葉敬愛短期大学紀要第39号, 487 (2017)
- 29) 前掲書 28), 487
- 30) 前掲書 8), 86
- 31) 前掲書 2), 89
- 32) 長澤順、山崎由美子 (ほか)「本学保育者養成課程におけるピアノ教育の現状と課題」、作大論集 6号、作新学院大学 作新学院大学女子短期大学部 (2016)
- 33) 吉村淳子・芝崎美和「自己効力感を高めるピアノ指導の検討 —目標シート活用の試み—」、新見公立大学紀要 第37巻, 71-76 (2016)
- 34) 岩口摂子「保育者・教員養成課程のピアノ実技の授業研究」相愛大学研究論集, 11-23 (2016)
- 35) 前掲書 14), 108
- 36) 前掲書 22), 17-18
- 37) 木村次宏・篠原友里「小学校教員養成段階におけるピアノ基礎技能習得の意義 —学校現場において求められる音楽的資質能力の育成を目指して—」福岡教育大学紀要 第六分冊 教育実践研究編 67, 1-8 (2018)
- 38) 鈴木由美子「ピアノ初心者へのピアノ実技指導に関する一考察 練習意欲維持のための試み」、千葉敬愛短期大学紀要 39, 429-430 (2017)
- 39) 前掲書 12), 53
- 40) 村上隆『ピアノがうまくなる理由 ヘタな理由 理由を知るから上達が早くなる!』、村上 隆著、株式会社リットーミュージック, 8 (2012)
- 41) 三木愛子「【ピアノ練習法】初心者が倍速で上達する効率のよい練習方法とは」、<https://www.rere.jp/beginners/4975/> (2018年5月23日)
- 42) 吉村 淳子「保育者養成におけるピアノ初心者に対する指導」、新見公立短期大学紀要 第35巻, 80 (2014)
- 43) 園部三郎「第一部 音楽教育論ノート」『下手でもいい音楽の好きな子どもを』園部三郎著 音楽之友社, 52 (1975)
- 44) 前掲書 43), 53
- 45) 前掲書 43), 63
- 46) 前掲書 43), 63
- 47) 前掲書 43), 63
- 48) 前掲書 2), 041

注1.



<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> (2018年5月5日)

参考資料（アンケート用紙）

幼児音楽表現Ⅱ ふい返し

20 年 期

1年 A・B・Cクラス 番 名前

20 年 月 日

あてはまるものに○をつけてください。

社会人基礎力の能力要素		具体的行動事例	自己評価
前に踏み出す力	主体性	・技術の習得のために自ら練習をすることができる。 ・授業の中でわからないことや疑問があればそのままにせず質問して解決することができる。	5・4・3・2・1
	実行力	・困難があっても目標を変更せず到達することができる。	5・4・3・2・1
考え抜く力	課題発見力	・苦手なことも諦めず課題を見極めることができる。 ・予習、復習の際に学習上の問題点を考えて取り組むことができる。	5・4・3・2・1
	創造力	・固定観念に捉われることなくいろいろな方向から考えることができる。	5・4・3・2・1
チームで働く力	発信力	・自分の感じたことや、考えを発表することができる。	5・4・3・2・1
	傾聴力	・歌唱・グループ発表を通して、意見交換や自分の意見を述べるすることができる。	5・4・3・2・1
	状況把握力	・良い授業を作り上げるため、クラス全体の状況を把握することができる。	5・4・3・2・1
	規律性	・自分の都合を優先することなく集団のルールを守ることができる。	5・4・3・2・1

※評価基準 5:よくできた 4:できた 3:まあまあできた 2:あまりできなかった 1:できなかった

◆授業をふり返っての感想

